書 評

平田喜彦編：繁栄期・大恐慌および ニュー・ディール

——両大戦間アメリカ経済文献目録——

雄松堂書店・東京，1972年

鈴 木 圭 介*

両大戦間のアメリカ，とくにニュー・ディール期についての研究はアメリカのみならず日本の経済学・歴史学研究者にとって，いつまでも変らない興味あるテーマであるが，この期間に限っての文献目録が出版され，それも立派な装釘で，完全な洋書のスタイルで出版された。この書物の著者は平田喜彦氏で，アメリカの金融問題研究者である。いわゆる“自己金融”の現象の銀行業務への反映について興味ふかい分析を行っていたのを読んだことがあり，まだ面識はないけれども氏の名前はずっと以前から知っていた。それが思いがけなく筆者の旧友杉本俊朗君の女婿になられたので，その点でもこの著者の名前は筆者にとって身近なものであった。この書物のブック・レヴューはもう1年以上前から話があったのに，ある時は出版社の都合で，またある時は筆者の都合で今日までのびのびになって了ったのは残念であった。

実はニュー・ディール期の経済文献目録については，筆者はとくに強い関心をもっている。というのは筆者自身以前に同様の内容の文献目録を作製したことがあるからである。それは東京大学社会科学研究所から出版された嘉治真三編“ニュー・ディール文献目録（経済篇）”（1960年）で，筆者はこれを神野璋一郎和歌山大学教授と協力して編集に参加した。後になって田口陽一竜谷大学教授が協力して下さった。私の知っている有能な文献学者は一人は杉本君で，もう一人は神野君である。この二人の博識には頭が下るばかりであるが，その神野君の参加した“ニュー・ディール文献目録”であったのに，筆者がブレーキになってその出来栄えをずい分損って了った。筆者はあの当時長い闘病生活からやっと立ち直ったばかりであり，神野君とカードの読みあわせをしながら，時々崩れそうになり発熱したりするのを我慢しながら仕

*すずき　けいすけ　東京都立商科短期大学

事をつづけた。今，新しい平田編“繁栄・大恐慌およびニュー・ディール——両大戦間アメリカ経済文献目録”を目の前において，編者平田氏の努力と苦痛と仕事のあとの満足感とをまざまざと実感することができるような気がする。

この文献目録がカヴァーしている時期は，第一次大戦後のいわゆる資本主義の全般的危機の時期にあっている。大戦直後の動乱の時代，いわゆる相対的安定期の繁栄の時代，そして資本主義の経験した最大の恐慌である1929年恐慌以後の危機的な時代とそれに対応するニュー・ディールの時代，という劇的多彩な時期である。研究者の食欲をそそるに充分である。

しかも，ニュー・ディールの社会的政治的役割については意見が分れて論争を呼ぶかもしれない状態である。ニュー・ディールは当時，“統制経済”ないし“計画経済”と呼ばれたが，アメリカの国家独占資本主義段階の経済政策が真の計画性を持ちうるはずがなかった。けれどもニュー・ディールのもっている一応の改良的進歩性は複雑な性格を与えていた。その左側には，1928年から始ったソ連の第1次5カ年計画があり，その右側にはローズヴェルト大統領就任と同じ年（1933年）に政権を獲得したヒットラーのドイツのナチズムがあった。一口に国家独占資本主義といっても，アメリカとドイツとでは大分ちがいがあるようであった。

ニュー・ディール初期の段階においては，左からの批判はきびしいものがあった。それはニュー・ディール側にもそうされる丈の理由があって大恐慌からのアメリカ経済＝資本主義体制の防衛，したがって独禁法の緩和，独占資本の利益と国家的政策の融合などの情況があった。また左翼の側にも一切の改良主義的改革を社会ファシズムと規定して統一戦線を拒否する傾向があったので，ニュー・ディール政策をアメリカ金融資本の直接的政策と規定して，それが持っている積極面をすべて無視する風潮があった。たとえばヴァルガはニュー・ディールを規定して，“計画的な国家資本主義を装える社会ファシズム”であり，“陰蔽されたファシスト的デマゴギー”であると述べた。

しかし，次の段階になって1935年コミンテルン第7回大会における，有名なディミトロフ報告において，すべての独占資本の政策を直ちにファシズムと断定するのは誤りであるとされ，統一戦線戦術が提起された。そして，第2次世界大戦になって，ソ連をふくむ“自由国家”側の同盟が，日本・ドイツ・イタリーと戦端を開くにおよんで，スターリンはローズヴェルトのことを“資本主義国家の名船長”と呼んだ。これらの情況は左側からのニュー・ディール評価をいちじるしく緩和させることになった。そしてアメリカ国内においても真のファシズムの萌芽ともいうべきウルトラ・右翼からのニュー・

ディール攻撃が強化され，ニュー・ディールは一定の限界内において改良的立場を守った。WPA などによる困窮インテリゲンチャの救済も行われた。また1938年には反独占教書が出され，TNEC の調査が行われた。これが独占禁圧を伴わない口先の“調査”であるという批判を浴びたことも事実であるが，また一定の好意的評価をうけることになった。

さらに，第2次大戦終結以後において，――ローズヴェルトはすでに故人になっており，言葉の真の意味におけるニュー・ディールは終っていたが，――われわれ日本人にとって特に関心のあることには，日本の戦後改革に“ニュー・ディール左派の残党”が深くかかわっていたという報道があった。そしてこれらの人々の召還と帰国のために，日本の政治的経済的改革が骨抜きにされ，大きく右旋回したといわれる。このような戦後日本の歴史的事実について筆者は詳しく知るところがないし，またこのような評価が正しいかどうかは問題があるかもしれない。しかしこのニュースはニュー・ディールについて，その意義と役割をどのように理解するかの点で，当時のわれわれを強くつき動かし，その肯定面を大きくクローズ・アップした。

このように時期によってニュー・ディールに対する評価はさまざまな差異を経験してきたし，それとは別に現在でもアメリカの国家独占資本主義と他国（とくにドイツ）の国家独占資本主義とを比較する上で意見のちがいが見られる。その一方の極には国家独占資本主義である以上アメリカもドイツも同じだとする意見があり，それは，いれかわり立ちかわりさまざまな論者によって主張された。また他方アメリカ資本主義の特質をドイツのそれと同一視することは，両国の資本主義発展史のちがいに照らしてみて，まったくナンセンスだとする見解もある。さらに，またニュー・ディールはニグロや小数民族を救うことができず進歩どころか反動的政策であったとするものもあり，また逆にその改良的側面は否定できないと評価するものもある。目下のところアメリカにおいてニュー・ディールについての著書・論文は次々に現れて，つよい関心をひいているし，日本でも多くの研究者のテーマになっているが，今後の研究の促進で以上のような意見対立を克服してくれることが切に望まれている。そして，本書はそのための重要な手がかりになるものであろう。

ところで筆者たちが，社研での文献目録をつくっていたころ，この種の文献目録はアメリカにないだろうかと考えた。そこで嘉治教授から手紙で，ローズヴェルトとニュー・ディールについて最も包括的な資料の蒐集を行っているニュー・ヨーク州ハイドパークのフランクリン・D・ローズヴェルト図書館にあてて，同図書館で作製された文献目録はないかと問い合わせた。と

ころがその返事として届けられたのは Harverd Guide to American History, 1955 の第29章, Great Depression, 1930-1941 の20ページほどのリコピーだった。その親切には感謝したが，これはすでに目を通したあとであった。多分ローズヴェルト図書館はその文献目録をと考えるなら，図書館のカード全部をコピーして送る他はなく，それでさえもまだもちろん不充分で，このような依頼に答える方法がなかったのであろう。つまりアメリカには尨大な資料と蔵書はあるが，その文献目録は存在しないということであろう。だから日本人である平田氏の手によってニュー・ディール文献目録が作製されることは，日本人の研究者にとってばかりでなく，アメリカ人の研究者にとってもきわめて有用であろうと思われる。

ところで今回のこの文献目録は前にもふれたとうり，1930年代を扱う英文の著書に限定している。20年代については大恐慌を準備する経済的不均衡に関する若干の文献にかぎってこれを加えている。雑誌論文はのぞかれている。そしてその編別は全体を大きく２部に分け，第１部は著書・モノグラフ・報告書のたぐいを納め，第２部は政府文書という構成になっている。

編者はこの仕事を1969年から1970年にかけて，プリンストン大学経済部の客員研究員（visiting fellow）として滞米中に，自らの研究のための参考文献目録としてはじめた。そしてそれを帰国後，著書としてまとめて出版されたものである。文献の各冊について著者名・タイトル・出版地・発行所・出版年・ページ数を記入してある。これだけの丁寧な記述を各冊について統一的に日本で行うのが，どんなに大変な仕事であるか，筆者にも想像できるような気がして，その努力を大いに多としたいものである。そして平田氏がそれに成功されたのは，この仕事をアメリカで始められたということが一つの大きな原因になっているのであろう。さて，このような書評には一定の褒辞のあとでなにかしら著者への註文をつけて終るのがならわしのようであるが，筆者はとてもそれをする気になれない。強いていえば，本書の出版のあとにもニュー・ディール研究書が次々に出版されているので，本書の重版の際にそれらをとり入れてほしいという位のことである。